

ホステリングマガジン vol.33 / 2023 Summer

JAPAN
Youth Hostels, Inc.

H



ostelling Magazine

COVER INTERVIEW

知花くらら

窓の数だけある
人々の「暮らし」を見つめて

この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



さあ、いま、キミと!
ランチパック



小芝 風花
ランチパック



ランチパック



Kaneka

＼ 一過性のストレスを感じている方の ／

起床時の
疲労感
の軽減に
役立つ

睡眠の質
の向上に
役立つ※¹

一過性の
ストレス
の軽減に
役立つ



TV-CM放映中!!

わたしのチカラ[®]
Q10ヨーグルト

還元型コエンザイムQ10 **3**つの機能

機能

01

一過性のストレスを感じている方の、
睡眠の質※の向上に役立つ機能があります



機能

02

一過性のストレスを感じている方の、
寝起きに感じる**疲労感**を軽減する機能があります



機能

03

日常生活や仕事で感じる
一過性の**ストレス**をやわらげる



※ぐっすり眠れること、眠りが深いこと、睡眠中に目が覚めないことなど

日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟 (Hostelling International) や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

子どもはおとなに。
おとなは子どもに、
なれる場所。



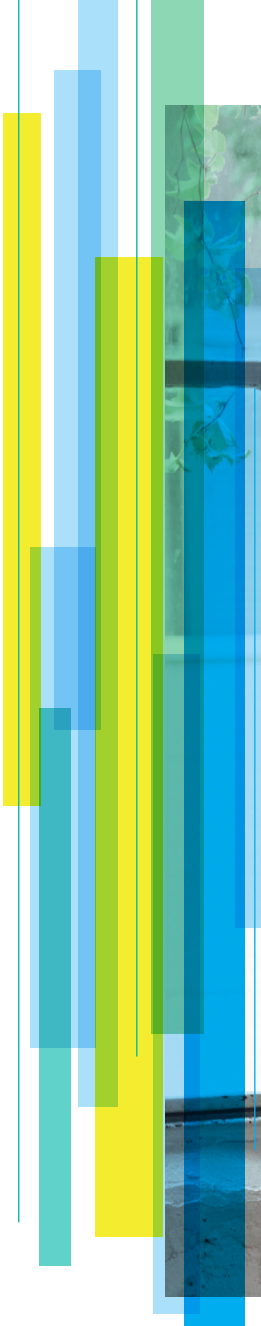
02	Cover Interview 知花くらら 窓の数だけある 人々の「暮らし」を見つめて
08	Youth Hostel Pick up 札幌国際ユースホステル 旅に魅せられた2人がつくる 集い、つながる宿
12	Hostelling Magazine × 地球の歩き方 中世の景色が残る魔法の国 チェコ
16	PLAtZ
17	おしえて! 旅GIRL
18	松島むうの晴れときどき旅びより
20	YH-GUIDE ユースホステルガイド 北海道/東北地方

※本誌の情報は2023年6月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL.(03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



窓の数だけある 人々の「暮らし」を見つめて

Hostelling Magazine Cover Interview

Kurara Chibana

知花 くらら

PROFILE |

モデル

知花くらら (ちばな くらら)

1982年生まれ、沖縄県出身。多数の女性ファッション誌でモデルを務めるほか、TV・ラジオ・CMでも活躍。上智大学を卒業した2006年にはミス・ユニバース世界大会で準グランプリに輝く。07年から国連世界食糧計画(WFP)のオフィシャルサポーターに就任し、日本親善大使を務めるなど約15年活動。12年からは沖縄・慶留間島で子どもたちのための保養キャンプも主催。19年には歌集『はじまりは、恋』を刊行。21年に京都芸術大学建築学科卒業、22年二級建築士試験に合格。

ヘア&メイク:内田香織 / スタイリスト:山本隆司(style*) / フォト:小林潤次(七彩工房)
ワンピース¥42,000 [ADELLY(Office surprise)TEL.03-6228-6477]、その他スタイリスト私物



外の世界を見てみたい 沖縄から東京、そして海外へ

—Hostelling Magazineは学生の読者が多いのですが、知花さんはどんな学生生活を送っていましたか？

高校までは沖縄県的那覇市にいました。友達の影響で音楽にハマって、SOPHIAとか、MARILYN MANSON、Green DayやNIRVANAなど、洋楽・邦楽問わずいろんなロックバンドに夢中になった高校時代でしたね。友達と一緒に当時まだ無名だったMONGOL800の追っかけをしていたこともありました。当時ライブハウスで本人たちが手売りしていたCDを今も持っているんですけど、これはもう私の誇りです！先日ボーカルのキヨサクさんにお会いしたときに言われましたもん「これ俺らも持ってないよ！」って(笑)。

—学生生活を満喫していたんですね！沖縄は知花さんにとってどんな場所でしたか？

実を言うと、当時は「外の世界を見てみたい！」という気持ちが強く、沖縄から外に出たくて仕方なかったんです。まだ沖縄の良さに気づいていなかったんですね。上京してみても「あぁ、沖縄っていいところだったんだな！」って改めて感じました。

進路について考えているときに東京の知り合いに「『外に出たい！』という気持ちが強い人は、九州や関西に出てどうせ東京を目指すことになるよ」って言われて。「なるほど、じゃあ最初から東京かな…」と思い、東京の大学に進学するんですけど、上京してみるとすぐに海外に興味湧いてきちゃって(笑)。

—在学中にはフランスに一年間留学されたと伺いました。「日本の外の世界」は当時の知花さんにどう映りましたか？

フランスの女性はみんな自立していて、議論に長けた人が多いな、と感じました。3人集まれば「『美』についてどう思う？」みたいな議論が始まるんですよ。そんな国民性だから、いろいろな場面で必ず意見を求められるし、自分の考えを表現することを求められるのが当時は新鮮でした。悪意や敵意なく「何を考えているかわかんないからちゃんとしゃべって！」と言われることもあって、「まだ全然フランス語そんなに話せないから無理！」って最初の頃は思っていましたね(笑)。

留学中、平日は大学で講義を受けて、休日にバックパックを背負ってヨーロッパ各国を巡ったりもしました。スイスの都市を回ったり、有名な服飾の学校があるベルギーのアントワープに行ったり。そのときはヨーロッパのユースホステルもたくさん利用しましたよ！

ミス・ユニバースへの出場を決めた 「社会のために何ができるのか」という想い

—ユースホステルには「いろんなバックグラウンドを持った人同士が同じ空間で生活することで理解を深め合う」というミッションもあるのですが、知花さんが2006年に世界第2位を受賞された「ミス・ユニバース」も、「世界中から集まった同年代の人たちが一堂に会る大会」という意味では共通点がありそうですね。

そうですね。ミス・ユニバースに出場してカルチャーの違いを知ることができたのはとてもいい経験になりました。例えば、あるアフリカの国の代表の方と話をしたときには「私の国では鼻が丸い女性が綺麗なのよ」と教えてもらったんです。「美しさの基準はひとつではなくて、国によってさまざまなんだなあ」と、彼女の言葉を聞いて改めて感じました。

あとは、南米や東南アジアから来てる方たちって、ハングリーさがあるから全然違うんです。彼女たちの国ではミスコンで優勝することで生活のレベルがすごく変わるんです。なので、みんなすごくストイック。カメラがたくさん入るオフィシャルイベントのとき、集合写真を撮るとなったらセンターの取り合いがものすごく激しくて。小競り合いになってしまうこともあって、そのときは「あなたは右に半歩ずれて！で、あなたはこっちに移動したら、ほらちゃんと顔が見えるでしょ？」と、私が仲裁していました(笑)。こういう役割って日本人らしいなあ…なんて思いましたね。

—そもそもミス・ユニバースに出場してみようと思ったきっかけは何だったのでしょうか？

高校時代からチャリティーや人道支援に興味があって、将来は国連やNPOのような組織に入って活動する道を視野に入れていたことがきっかけの一つかもしれないですね。大学時代は教育哲学や国際教育文献を勉強して、将来自分のやりたいことを考える中で「個人で社会に貢献することもできるけど、影響力のある立場になれば、より多くの人の支援に関わることができるんじゃないか」と考えるようになったんです。当時は芸能界に入るつもりはなくて、大会が終わったときも「よし、帰国したら就活しよう！」なんて思っていたんですけど、空港に着いたときにもすごい数の報道陣がいて。こんなに世の中に注目されていたのかと驚きました。そのまま芸能の仕事始めるようになったので、最初は本当に戸惑うことばかりでした。

文献ではわからなかった世界のリアルと、 学校給食の定着で目指す、選択肢のある社会

—芸能活動をする中で、2007年に国連 WFP(国際連合世界食糧計画)のオフィシャルサポーターに任命されて、その後は日本大使や日本親善大使を務められました。

そうですね。国連 WFPとの出会いはすごく大きくて、開発途上国の視察を通じていろんな現場を見せていただいたし、複雑な境遇の人たちにもお会いして「世界は今こうなっているんだ」という、大学生の頃にくら文献を読んでもわからなかったリアルな姿を目の当たりにしました。厳しい現実を目の当たりにする現場もありましたから、任命された当初は複雑な気持ちを抱くこともありました。ただ、暮らしている人たちにとってはそれが「日常」なので「自分の物差しで彼らの様子を見て“悲惨だな”と感ずるのは、違うな」って思うようになって。今、何を感ずているのかな？どんなことがあったのかな？何に困っているのかな？…というのを、彼らの会話を通じて知って、いこう、そんな感ずで活動していました。

—国連 WFPの活動の中でも、知花さんは特に「学校給食の普及」というところに注力されていたりしました。学校給食を途上国に普及させる理由を教えていただけますか？

前提として、貧しい国や地域に暮らす子どもの親御さんは「学校に行くくらいだったら働いてほしい」という感覚でいるんです。子どもは必要な「労働力」だから。子どもが学校に行くと、バケツで水を汲みに行ったり、家畜の世話をしたり、畑仕事をする人手が減ってしまうので、学校に行かせたくないんです。

ところが、給食がある学校は、親御さんはすごく喜ぶんです。経済的な負担を減らせるから「学校でご飯が出るんだったら、行っておいで！」と快く送り出してくれるわけです。給食がある学校とない学校

言葉の一つひとつにショックを受けていた記憶があります。高校時代から人道支援に関心があって、その想いはずっと変わっていません。けれど「もしかして中途半端なことをやっているのかな」って、すごく落ち込んで。でも、ファッションジャーナリストの生駒芳子さんと対談をさせていただいたときにその想いを打ち明けたら「何もしていないよりずっといいよ！」と言葉をかけてもらって。「今の立場だからこそできることがあるはず！」と割り切ることができるようになりました。

Kurara Chibana



を比較すると、前者のほうがドロップアウト（退学）率も減るんです。給食があればみんな卒業まで通えて、学力も上がっていく。学力が上がれば、仕事の選択肢も増えるし、教育の質が良くなって結果的に国の人材が育っていく。そうすれば、誰もがハッピーな状況になるんです。すべての国や地域に学校給食を普及させるのはとても難しい話ですが、少しでも力になれば…という気持ちでこれまで各国の学校を訪問したり、そのときに感じたことを2022年までさまざまな形で発信し続けてきました。

「モデルのお仕事をしながら国連 WFPでの活動を始められた頃には「モデルが慈善活動なんて、ただの自己満足」「高い毛皮やジュエリーを身につけている暇があれば途上国で活動すれば？」といった心ない批判もあったそうですね。当時はそういった意見をどのように受け止めていたのでしょうか？

同じ景色でも、見るときの心が違えば 詠む言葉も変わるのが短歌の魅力

—2019年に歌集『はじまりは、恋』を発刊されて、国連 WFPの活動に関連した内容の短歌も数多く詠まれています。短歌を詠もうと思ったのは、どういった経緯からだったのでしょうか？

元々、与謝野晶子や谷崎潤一郎などの純文学が好きだったんですけど、出版社の方に「現代短歌もすごく素敵なものがいっぱいありますよ」と勧められて。永田和宏さんの歌集を読んだときに「口語でも短歌ってこんなに豊かな表現ができるんだ！」と衝撃を受けて、興味が湧いたんです。それで、30歳の頃に趣味として短歌を詠むようになりました。

—普段短歌を詠まれるときに意識されていることはありますか？

処女歌集を出させていただくことになったときに「沖縄の歌を積極的に詠んでほしい」と短歌の師匠から言われたんです。ただ、沖縄の歌を詠もうとすると、何だかうまくいかない。国連 WFP の活動に関する歌もそうなんです。「これを伝えたい」とか「こうあるべきだ」みたいな気持ちが入ると、どこかスローガンようになってしまいます。ある時、師匠から「歌を詠むときは自分の立場を全部忘れて、一人の人間として、“知花くらら”として、何を感じているかを歌にした方がいい」と言われてハッとしたんです。短歌って、悲しいものを「悲しい」と詠むのではなく「何を見て」「自分の心がどう悲しいの

か」っていうのを言葉に昇華する文学なんですよ。今でも「私」が何を感じているのか」という感覚は意識して歌を詠むようにしています。

あとは、旅先でも単語が思い浮かんだらメモするようになりました。旅先の匂いとか、そういうものからインスピレーションを受けて、「これ使える！」「これは面白そう！」みたいに。ふと見かけた景色でも、見ているときの心が違えば詠む言葉も違ってくる。それが短歌の面白さですね。でも、言葉が飛び込んできたり、思い浮かんだりすると「ああ、今、私はちゃんと心に余裕があるんだなあ」と自分の心の状態を知ることができたりもするんですよ。

沖縄にある祖父の生家を譲り受けたことがきっかけで建築学を学ぶことを決意

—第一子を妊娠中の2019年に京都芸術大学の建築デザインコースに入学されたそうですね。芸能活動や執筆活動をしながら出産・子育てをして、さらに新たに建築を学ぶというのは本当にすごいです…。

今振り返ると、自分でも「よくやったなー」って思います(笑)。リスクリング(学び直し)ってトレンドワードなので、周りの女性たちにもよく聞かれましたね。「どうやって時間を作ったの?」とか「何を勉強したらいいと思う?」って。

—建築は元々ご興味があったんですか？

ずっと興味のある分野ではあったんですけど、ドのつく文系なので(笑) 学生のときは諦めていました。ただ、国連WFPの活動で世界を周る中で、途上国のいろんな住居に何う機会も多くて、その土地の風土に根差した家を見るのがすごく好きだということに気づいたんです。その後、祖父の沖縄の土地と家を引き継ぐことになったときに「譲り受けた家をどう建て直したらいいか」を自分で考えてみたくなって。それで、建築士の資格取得を目指すために進学を決めました。

—建築士の資格を取ろうという決断をされるのが知花さんらしいというか、普通の人にとってはハードルが高いです…！

家族のサポートありきですね。入り直した大学は通信制だったので、基本的には単位は家でレポートを書いて提出したり、試験を受けたりすることができるのですが、週末に実技科目のスクーリングがあって、そのときはどうしても子どもを預けなきゃいけない。夫に預けたり、夫も仕事の場合は義理の母や私の両親に来てもらったり、もうどうにかやりくりして。試験前とか課題の締め切り前には夫にすごく負担をかけたと思います…。

子育てをしながらの学生生活は大変ではありましたが、それ以上に楽しかった。「祖父の家をどう建て直せばいいのか」という自分の純粋な問いに答えたくて始めた学びだったので、それがどんどん解けていく感じが面白かったし、今までとは違う視点から建築を見ることができるようになったのも大きな収穫になりました。

—育児をしながら女性が「学び直し」をする上で必要なことは何だと思えますか？



一つ目は、私のように子どもがいる家庭の場合は、「家族の理解とサポート」が絶対に必要だと思います！二つ目は、「時間をどう作るか」ですね。「今月はこの課題がこれだけあって、締め切りはいつで…」とスケジュール帳に入れて、逆算しながらやるべきことを TODO に分割して整理した上で、ちょっとずつでも進めるのがポイントです。家庭もあるから、そうやって進めていかないと本当に間に合わなくなるので…。集中して課題に取り組もうと思っていた日に限って、子どもが熱を出して保育園からお迎え要請の電話がかかってきて背筋が凍る、という経験もしました…。二級建築士の国家試験前は本当に地獄のような日々(笑)でしたけど、2度目のチャレンジで無事に合格することができました！

海には人の心を開放する力がある

—2023年4月からは新たに朝の情報番組『DayDay.』にコメンテーターとして出演されています。出演されてみていかがですか？

これまでも何度かコメンテーターのお話をいただいたことがあったのですが、私に務まるお仕事じゃないとずっと思っていたんです。でも、実際に経験させていただいたらすごく楽しかったですし、やりがいを感じています！

結婚して子どもが2人いて、親としての目線で世の中を見るようになってから、20代の頃と比べるともっと「社会参加」をしている感じがするんです。独身のときは、「一人でもなんとかなる」という感覚があったんですけど、子どもがいるとそうはいかなくて。この前、久しぶりにベビーカーを押して青山に来たら、おしゃれなお店にはベビーカーでは上れない段差が多いことに気づいたんです。若いときには全然気にも留めなかった段差が、家族ができてからはとてつもなく大きな「社会との段差」に感じたりもして…(笑)。そういった社会で暮らす中で感じた気づきや悩みを、今後もコメンテーターとして発信していけるといいなと思っています。

—2021年には都心から海辺の街にお住まいを変えたそうですね。暮らしにはどんな変化がありましたか？

都心で暮らしていたときに比べると、もちろん不慣れなこともあります。徒歩圏内にスーパーがないので移動手段が車中心になりましたし、お仕事の現場に向かう通勤時間も長くなりました。

ただ、都心にいた頃は子どもの足音や泣き声を気にしながら生活をしていたけれど、今はそういうストレスから解放されました。遊ぶ場所に困ったら家のすぐそばにある海に行けばいいし、自然を間近で感じられるというのは子どもたちにとって良い環境なんじゃないかなって思います。波の音を聞くと、頭のネジが緩んでリラックスできる気がするんですね。「美しい海を見て笑顔になってほしい」という想いから、2012年以降、東日本大震災で被災した福島の子どもたちを招待して私の祖父の故郷である慶留間島で「げるまキャンプ」という保養キャンププロジェクトを立ち上げました。コロナ禍でここ数年は開催できていませんが、参加してくれた子どもたちがす

ごく喜んでくれていたのがとても印象深いです。海って気持ちを開放することができる場所だと思うので、子どもたちのいきいきとした姿を見ているのがすごく楽しかったし、開催してよかったと今でも思っています！

旅で得た経験や気づきが私の選択肢を広げてくれた

今までいろいろな経験をする中で、時には精神的につらい時期もありましたけど、基本的に「コレをやったぐらいじゃ命を落とすことはない！」という想いがある。今までいろいろなチャレンジをし続けてこられたのは、国連WFPでの活動をはじめとする旅を通じてたくさんの国や地域を見てきたからだと思うんです。

マサイ族って、良くも悪くも民族としての価値観をしっかり持っていて。男の子はウォーリアー(戦士)として生きる。女の子は若いうちに結婚して、第何夫人になって、夫が立ち寄る家を自分たちで建てて家畜を飼って…という人生が決められているんです。以前、マサイ族の女性から「本当は勉強をしたいのに、村の人たちに結婚を強制されて結婚前夜に一人で数時間かけて隣村へ逃げ出したの」という話を聞いたときに思ったんです。「甘えたこと言っていられないな」って。

世界には選択肢がない生活をしている女性や子どもたちがたくさんいます。彼らと比べたら、私たちにはたくさんの選択肢があります。だからこそ、私は「これもやってみよう」「あ、こんなこともできそうだな」って、手探りを続けてきました。私が活動をすることで、旅先で出会った人たちにも何か刺激になってくれたらいいな、と思いつつ。

自分の選択肢を広げるヒントは、海外の人との交流や景色からたくさん得ることができたと思います。若い読者の皆さんも旅に出て、窓の数だけある人々の「暮らし」を見つめてみると、きっと何かを見つけられるんじゃないかな。

—もしお子さんが成長して「一人で旅に行きたい！」とおっしゃられたら、どうしますか？

背中を押しますね！一人旅は学ぶことが多いので、いい経験になると思います。二人とも女の子なので、気をつけるポイントを伝えます。私も一人旅ばかりしてたので、そのときの Tips を教えつつですね！

DayDay.

NTV「DayDay.」毎週(月)～(金)朝9時から生放送！
知花くらら：水曜日レギュラー(月1回出演)



抽選で **知花くららさん直筆サイン入り色紙1名様**にプレゼント!

応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申し込みフォームから！

<http://www.jyh.or.jp/hmq>

応募〆切:2023年8月末日

※当選者にはご応募時にご登録いただいたメールアドレス宛にご連絡いたします。
@jyh.or.jpからのメールが受信できるように設定をお願いいたします。



日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟(Hostelling International)や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。



Hostelling Magazine vol.33



Cover Interview
知花くらら
窓の数だけある
人々の「暮らし」を見つめて

P.02



Youth Hostel Pick up
札幌国際ユースホステル
旅に魅せられた2人がつくる
集い、つながる宿

P.08



Hostelling Magazine
× 地球の歩き方
中世の景色が残る魔法の国
チェコ

P.12



PLAtZ

P.16



おしえて! 旅GIRL

P.17



松島むうの
晴れときどき旅びより

P.18



YH-GUIDE
ユースホステルガイド
北海道/東北地方

P.20



Hostelling Magazine vol.33
まとめてダウンロード

※本誌の情報は2023年6月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL.(03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。